

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 22 日現在

機関番号：82702

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520732

研究課題名(和文) 中世鎌倉地域における寺院什物帳(文物台帳)と請来遺品(唐物)の基礎的研究

研究課題名(英文) A Reserch for the Documents of Valuable Goods in Medieval Kamakura.

研究代表者

古川 元也 (FURUKAWA, Motoya)

神奈川県立歴史博物館・その他部局等・主任学芸員

研究者番号：60332392

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本の中世社会(12世紀半ばから16世紀を指定)に受容された大陸からの請来品、いわゆる「唐物」が、実際にはどのような文物であり、どのような意識を持って受けとめられていたかを明らかにする比較史(資)料論であり、東アジア的視点に立つ文化交流史として研究を行った。

具体的には、中世前期に宋元の文物が移入された鎌倉地域を対象とし、文物台帳としての什物帳を残している寺院史料に検討を加えることにより、当該期における「唐物」の位置づけを明らかにし、同時に種々の請来遺品との比較検討によって具体像を明らかにする基礎的研究として結実した。

研究成果の概要(英文)：This reserch is a one of basic reserch for the old documents of valuable goods in medieval temple at kamakura district. They say the relations between the temple monk's tastes and valuable goods which comes from Chaina, especially Son dynasty, and this could explain the medieval people's sense of value around Kamakura. These valuable goods are often called KARAMONO, goods which from China, and it is said that medieval Japanese thought them very important, valuable, generally. But it has possibility that the knowledge and recognition of those at that time was slightly different from the very life things, so this reserch sought into the difference which existed in documents of temples in Kamakura. Thought these documents are very few in fact, several traces of KARAMONO worships and successions could be appeared in this report. The report, book form, which has been sent all over mainly library contents details of every documents contents. Please refer to it.

研究分野：日本中世史

キーワード：中世 鎌倉 寺院 唐物 什物 文物 請来 青磁

研究成果報告

1. 研究開始当初の背景

本研究は、日本の中世社会(12世紀半ばから16世紀を指す)に受容された大陸からの請来品、いわゆる「唐物」が、実際にはどのような文物であり、どのような意識を持って受けとめられていたかを明らかにする比較史(資)料論であり、東アジア的視点に立つ文化交流史として研究を行った。

具体的には、中世前期に宋元の文物が移入された鎌倉地域を対象とし、文物台帳としての什物帳を残している寺院史料に検討を加えることにより、当該期における「唐物」の位置づけを明らかにし、同時に種々の請来遺品との比較検討によって具体像を明らかにする基礎的研究としてである。

近年、中国大陸および朝鮮半島から輸入・請来された舶載文物の研究はめざましく、本年の歴史学研究会大会古代部会での皆川雅樹氏報告に象徴されるように「唐物」の再検討が関心を集めている。この背景には、従来、主に美術史学、あるいは考古学分野からの関心が主体であった文物の研究に、大陸文物受容史の観点から史料の再検討が行われ、史料と資料の比較検討が活発になりつつある研究の現状がある。

研究代表者が本務とする博物館は史料と資料の比較検討を従来から行っており、これまでの研究環境において中世社会における「唐物」の実体を探る試みを行ってきた。また、根津美術館『南宋の青磁 宙をうつすつわ』(創立70周年記念特別展、2010年10月) 徳川美術館『室町将軍家の至宝を探る』(秋季特別展、徳川美術館・名古屋市蓬左文庫・中日新聞・文化庁主催、2010年10月)が相次いで開催され、茶道資料館シンポジウム「鎌倉時代の喫茶文化」(2008年11月、京都新聞文化ホール)における村井章介氏講演「輸入文化としての喫茶 - 13~14世紀の文字資料から - 」、京都国立博物館公開国際セミナー「東アジアをめぐる金属工芸 地域特質と相互文化認識、交流媒体の研究」(2009年9月)における羽田聡氏「中世史料研究と唐物」、家塚智子氏「室町時代における唐物の受容 同朋衆と唐物」らの報告を得るなど「唐物」の実体研究は活況を呈している(後者は久保智康氏編『東アジアをめぐる金属工芸』勉誠出版社、2010年7月として公表)。

このような研究状況の中で、請来文物に対する知見も増加し、研究を進めていく環境は整備されたといえよう。研究代表者は神奈川県に所在する博物館の研究員であるという立場から、鎌倉地方の諸寺院に残された中世の什物目録(物品台帳)と実際の文物との間の関係に着目していくつかの研究を行ってきた。具体的には、

(1).平成12年に行われた『鎌倉彫名品展』で「記録に見る鎌倉彫とその周辺」(『鎌倉彫名品展 古典から近代鎌倉彫まで』pp.85-87、2000年8月)、「鎌倉彫と鎌倉物

三条西実隆の意識から」(『神奈川県立博物館研究報告 人文科学』27号、pp.21-41、2001年3月)を報告し、中世における請来文物に対する意識の変容を、近代産業である鎌倉彫の影響とは切り離して史的に具体的に考察し、

(2).研究代表者として従事した神奈川県立歴史博物館総合研究(2003年度~2005年度)「中世東国の仏教美術」の研究成果は、平成19年に行われた『宋元仏画』展に結実して「唐物の請来と価値の創出」(『宋元仏画』所収論文、pp.135-156、神奈川県立歴史博物館、2007年10月)、「唐物考 「仏日庵公物目録」を中心に」(『年報三田中世史研究』14号、pp.7-31、慶應義塾大学大学院研究室、2007年10月)の公刊を行った。

(3).とくに中世における宋元文物の受容が論じられる際の基礎的史料である鎌倉円覚寺所蔵「仏日庵公物目録」に対しては「「仏日庵公物目録」成立に関する一考察」(『神奈川県立博物館研究報告』第35号、pp.13-24、2009年3月)のなかで史的に厳密な書誌的検討を加え、これまでの「唐物」理解に再検討を促した。本研究はそのような研究の前進を受けて提起されるものである。

(4).平成21年に行われた『鎌倉の日蓮聖人 中世人の信仰世界』展では、これまであまり検討の素材とされなかった鎌倉を中心とする日蓮宗寺院の什物目録を複数検討し、14世紀の文物に対する価値観がその後の教団内でどのように尊重されていったかを明らかにした。この一部は「中世日蓮教団と足利尊氏の残像 摩利支天画像の添状から」(『鎌倉の日蓮上人』所収論文、pp.150-153、2009年10月、神奈川県立歴史博物館)として結実した。この点は、ともすれば禅宗寺院に傾斜する傾向のある寺院什物の研究に対して、中世寺院全般に対する横断的な視点を与えた。

また、研究代表者は、本研究を開始する前年には「中世唐物再考 記録された唐物」(『唐物と東アジア』所収論文、pp.131-145、2011年11月、勉誠出版社、島尾新、五味文彦他編)「鎌倉円覚寺「智真夢記」と「仏日庵公物目録」」(『神奈川県立博物館研究報告』第38号)をすでに公刊し、中世に受容された「唐物」の実体解明と史(資)料の厳密な比較検討の重要性を指摘している。

2. 研究の目的

本研究については、すでに基礎研究の初期段階を公刊していることもあり、研究の方策、手順は比較的明確であった。中世史料は少ないことが予想されるので、室町時代から近世にかけてに生じた「唐物」認識の変化を、什物帳を通じて検討することも研究内容に加えた。3カ年という限られた年限であるため、当面の到達目標を次のように設定した。

(1).中世前期(12世紀半ばから14世紀)

に受容された宋元文物を史的に確認・把握する。

(2). 鎌倉地域において什物が前近代を通じてどのように記録されてきたかを明らかにする。

(3). 伝世文物、出土遺物の両面から輸入された文物の実体を追求する。

(4). 諸史料に現れる「唐物」と実体との比較検討をおこなう。

これらの目標を追求することにより、中世社会に受容された「唐物」の実体を、政権がおかれた鎌倉地方の史(資)料を中心に明らかにすることができ、禅宗寺院のみならず、鎌倉地方の中世寺院に残された什物帳(文物台帳)等を広範囲かつ横断的に検討材料とすることとした。什物関係史料は後世の改変や編纂を受けやすいが、その点は、史料に対する検証を徹底に行い、近年研究が深化している美術史学、考古学分野の成果を反映することに努めた。

そのため、これまで一部什物帳(文物台帳)の分析に偏っていた「唐物」研究を、鎌倉地域の寺院什物史料へと広げ、中世前期の横断的・面的な理解につなげた。また、漠然と用いられていた「唐物」概念を明確化することにより、古代(8世紀から12世紀前半)における船載文物と対比して中世における宋元時代船載文物の特質を際立たせることができると考えた。くわえて、「唐物」が記載される什物帳を精密に検証することにより、寺院における文物台帳そのものの史料論的検討に資することが可能で、寺院に伝来し、また遺跡から発掘される中国宋元時代の文物の実体を什物帳と比較検討することにより、中世前期(12世紀半ばから14世紀)の「唐物」の実体を明らかにし、具体像を提供することを最終的な目的とした。

本研究の成果は究極的にはで請来遺品(宋元船載文物・唐物)と寺院什物帳(文物台帳)との史(資)料比較検討・検証を通じて史料論、美術史学、考古学などの諸分野に資することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では鎌倉地域に関係して残された寺院什物帳(文物台帳)にみられる請来遺品の完全把握と史料論的検討、大陸から請来された伝世文物、出土遺物の実体把握、およびその比較検討を三ヶ年でを行った。

平成 24 年度は、研究代表者のこれまでの研究等で端緒が付けられている寺院史料の調査研究を行い、美術・工芸・考古分野の遺品研究はそれぞれの研究成果を援用、協業しながらデータ集積に努めた。方法は、実査、撮影、調書作成が主体となった。前年度より計画をしていた本務(神奈川県立歴史博物館)での特別展、『世界遺産登録推進三館連携特別展 武家の古都・鎌倉』展に関連して、

鎌倉市内出土の大量の遺物に接することが出来たことは幸運であった。展示に関連して、鎌倉国宝館のほか神奈川県教育委員会文化遺産課、鎌倉市教育委員会文化財課、世界遺産登録推進担当との協力を仰ぎながら、研究を実施することが可能となった。

本研究は、主に以下の手続きによって進められたが、その方法は実査、撮影、調書作成が主体となった。

(1). 寺院史料の調査研究

(2). 美術・工芸・考古分野の遺品研究

(3). 美術・工芸・考古分野の遺品研究(データ集積)

鎌倉地域の寺院史料調査については、史料所蔵寺院との信頼関係も重視しなければならないが、本務である神奈川県立歴史博物館の従来からの関係に加えて、鎌倉市内で多くの寺院史料の寄託を受けている鎌倉国宝館(鎌倉市教育委員会)の協力を得たことを記しておく。また、市内出土遺物の検討に際しては鎌倉市教育委員会文化財課(現・文化財部)のご協力を得た。記して感謝したい。

具体的には、市内禅宗寺院円覚寺、建長寺、報国寺ほかの史料群を検証し、伝世文物との関係を個別研究で明らかにし、埋蔵文化財・遺物では神奈川県立歴史博物館寄託八幡養生コレクションの研究にあてた。

平成 25 年度は、金沢北条氏を介して鎌倉と関係を持つ金沢称名寺(真言律宗)の史料(「金沢文庫文書」)を中心として、同寺に伝来する文物および県外に所在する史料、文物の研究にあてた。また、考古遺物のデータ収集については赤星コレクションに含まれる関連遺物の研究にあてた。

平成 26 年度は、これまで継続して行ってきた予備調査をもとに、鎌倉市中央図書館近代史資料収集・特殊形態資料室のご配慮を得て、同室架蔵の『鎌倉市史』編纂関係資料である写真帳を利用させていただき、什物帳の内容精査を行った。特に禅宗以外の市内寺社史料の調査と所見の作成にあたった。

また、最終年度である本年度は、研究報告書の作成と研究成果を還元するための展示活動(公開)に向けた準備を行っている。什物帳と「唐物」の研究であるため、報告書には多色刷図版を加え、あわせて開発が進行する以前の鎌倉を詳細に知ることのできる、3000分の1鎌倉市都市計画図を編集の上、資料編に加えることとした。

なお、研究代表者は科学研究費補助金・基盤研究(B)(平成23~25年度・大正大学)「高野山宿坊史料の悉皆調査に基づく高野山子院と地方大名家との師檀関係の研究」に研究分担者として参加していたため、寺院什物帳の分析と寺院伝世文物の関係を追求するという点では、研究の成果が相乗的に得られた。

4. 研究成果

(1). 研究の視角

本研究「中世鎌倉地域における寺院什物帳(文物台帳)と請来遺品(唐物)の基礎的研究」を遂行するにあたって、具体的史料調査の結果として制作された什物帳の分析結果を、研究成果の核としてここに提示することとする。

本研究の主目的は、鎌倉にもたらされた唐物の実態を記録と遺物から追求しようとするものであり、ここでは前者、記録された唐物についての考察を行うこととした。そのためには、寺院(実質的には神社も含む、以下同じ)が所蔵する史料類から検討を行わなくてはならない。現在、鎌倉市内には多数の寺院があり、その起源が中世に遡るものも多い。

とはいえ実際には、中世成立の寺院什物帳は極めて限られている。円覚寺所蔵の「仏日庵公物目録」は、中世禅院の什物を知ることのできる貴重な史料であり、歴史学、美術史学、考古学の諸分野で用いられる重要な史料であるが、このような史料は他例がなく、そのこと自体が「仏日庵公物目録」の特殊性と異質性を物語っていることをこれまで論じてきた所である(古川元也「仏日庵公物目録と記録される唐物」(貿易陶磁研究会、2012年9月29-30日、青山学院大学))。

本研究では、その点を踏まえて鎌倉の寺社に所在する什物関係資料を悉皆的に調査し、

A 従来未見の什物目録の検出

B 中世什物帳を継承した可能性のある近世什物帳、近代什物帳の検証

を試みた。寺院什物、什宝(重宝)が、中世より継続的に相伝されるならば、当然のことながら什物目録も継続的記述が見られると推測しうるのである(具体的には別冊としてすでに配布を完了している研究報告書第1章論考を参照されたい)。ここでは、その方法と手続きの具体について言及しておく。

(2). 鎌倉市域寺院の什物帳

鎌倉市域寺院(神社)の史料については、自治体史の制作が比較的早くから行われていた鎌倉にあっては刊行されているものも多く、それに付随して、資料目録も充実しているといえよう。本研究に関係するものとしては、『鎌倉市史』(高柳光壽、貫達人、川副武胤、佐脇栄智など。昭和31年~)、『改訂新編相州古文書』(貫達人編、神奈川県教育委員会、昭和40年~45年)、『鎌倉近世史料』(鎌倉市教育委員会、昭和42年~平成10年)、『神奈川県史』(神奈川県県民部県史編集室、昭和45年~58年)、『鎌倉志料』(鎌倉国宝館編・発行、平成3年~)等があるが、鎌倉市内の寺社の史料を広範囲かつ均質に扱っているものとしては『鎌倉市史』が随一であろう。あわせて鎌倉市の場合には文化財目録が『鎌倉市文化財総合目録 古文書・典籍・民俗篇』として編纂されており(鎌倉市教育委員会、昭和60年3月。なお、神奈川県域で

は『神奈川県古文書資料所在目録』(神奈川県立公文書館・同文化資料館編、発行、昭和54年~)がある)市史と目録を合わせ確認することにより、より具体的な史料の追跡が可能となる。また、個別の寺社については史書を編纂している場合もあり、『円覚寺史』(玉村竹二、井上禅定等編、昭和39年12月)や『鶴岡叢書』(鶴岡八幡宮社務所編、昭和51年~平成3年)はその先駆的代表作である。

しかし、それら史書に所載される史料は、中世以前の史料である場合が大半で、近世、近代史料の多くは歴史叙述上で重要視される史料の抄出に過ぎない。上記研究の視角Aに属する史料は限られており、これらについては神奈川県立金沢文庫、鎌倉国宝館をはじめとする県内史料所蔵機関との情報交換を通じて検証を進めた。一方、Bの検証には近世、近代史料の調査が欠かせないが、その史料は膨大であり、大半が未刊史料である。

そこで、本研究の調査対象となる寺社の史料現存状況を把握するため、『鎌倉市文化財総合目録 古文書・典籍・民俗篇』によって、状況を把握することに務めた。中世に存在した寺院が現在では廃寺となり、その史料が他寺に移動している場合もあるため、近世期成立の寺社も調査対象とした。本研究で調査の対象とした寺院は、大凡の所在地区ごとに区分すれば以下の通りである。

・十二所・浄明寺・二階堂

光触寺 明王院 浄妙寺 報国寺 瑞泉寺
覚園寺 杉本寺 鎌倉宮 荏柄天神社

・西御門・雷ノ下・扇ヶ谷・小町

来迎寺(西御門) 八雲神社(西御門) 鶴岡八幡宮 英勝寺 寿福寺 浄光明寺 薬王院 海蔵寺 大巧寺 本覚寺 妙隆寺 蛭子神社 宝戒寺

・大町

妙本寺 常栄寺 別願寺 教恩寺 八雲神社(大町) 上行寺(大町) 本興寺 安養院 大宝寺 妙法寺 安國論寺

・材木座

延命寺 長勝寺 来迎寺 妙長寺 向福寺
実相寺 九品寺 補陀洛寺 光明寺

・長谷・坂ノ下・極楽寺・腰越

収玄寺 光則寺 長谷寺 高德院 御霊神社(坂ノ下) 成就院 満福寺 本成寺 妙典寺 東漸寺 小動神社

・梶原・寺分・山崎・上町屋・手広・笹田

等覚寺 御霊神社(梶原) 東光寺 駒形神社 昌清院 北野神社 泉光院 天満宮 青蓮院 仏行寺 常盤山文庫 円久寺

・山ノ内・小袋谷

建長寺 妙高院 竜峰院 正統院 天源院
宝珠院 円応寺 光照寺 明月院 甘縄神社 葛原岡神社 多聞院 円光寺 玉泉寺
円覚寺 白雲庵 黄梅院 浄智寺 帰源院
仏日庵 富陽庵 寿徳庵 続燈庵 如意庵
東慶寺 九成寺 千手院 蓮乗院 称名寺
大長寺 西念寺 貞宗寺 成福寺

・大船・今泉・玉縄・植木・その他

小坂家(二階堂) 林家(浄明寺) 臼居家(大町) 加納家(扇ガ谷) 内海家(手広) 東京大学法学部法制史資料室 青木家(藤沢市文書館寄託)

ところで、これらの社寺に目録上伝存する史料を三ヶ年という年限の中で個別に調査することはおそらく不可能であった。そこで、資料そのものの吟味をその都度行うことはせず、必要に応じて実査することとした。什物帳の分析は、正文が案文かといったような史料そのもののオリジナル性に重要性があるわけではなく、記述内容が大切になってくる。記述内容の精査については、『鎌倉市史』編纂に際して制作された調査写真(マイクロフィルム)を検討することとし、その全容の把握に努めた。『鎌倉市史』編纂に際しては、市内各寺院の史料を可能な限りマイクロフィルム撮影しており、フィルム目録と紙焼写真帳は鎌倉市中央図書館近代史資料収集・特殊形態資料室(以下、近代史資料室とする)に架蔵されている。

(3) 分析上の問題点

分析を進めるにつれて、いくつかの問題点が明らかとなった。最大の問題は、『鎌倉市文化財総合目録』(昭和60年)での史料整理と『鎌倉市史』編纂資料写真段階(昭和30年代~)での資料把握との間には、資料名の齟齬、資料自体や写真の有無等の異同が多くあり、現時点では資料の確認ができないものも多い。目録の採番方法も異なるため、資料名称が異なった場合に、同一資料なのかどうかの判断が現時点では付かない場合が存在した。よって、分析結果(「内容」、「法量」)には空欄としたものが多数出てしまったことである。

また、宗派、あるいは什物帳によっては什物の記載順序や用語が大きく変化する。そのこと自体は、近世以降の寺院社会における、什物の位置づけを考える上で重要な論点を提供しているのだが、所見を統一した基準で記してゆく上では大きな障害となった。極力統一した基準で所見を記すべく、これら什物帳の調査は研究代表者本人の単独作業として行ったが、三ヶ年にわたる調査のため、時期による所見の精粗は否めない。什宝中に存在する唐物相当品(たとえば青磁華瓶や古銅作品など)、本尊、重要彫刻作品等については極力所見を記すと共に、作者や来歴などが記されている場合には、その真偽はさておき、記述することに務めた(たとえば、「弘法大師御作」「恵心僧都筆」などである)。

(4) 什物帳の分析を通じて

上記のような方法と手続きを経て、寺院什物帳に記された文物の性格を述べておきたい。後掲別冊報告書第 章の論考でも指摘したとおり、中世にしばしば作成された什物目

録がせいぜい一紙から数紙にわたる、限定的な重要物品であることに対して、近世期以降に作成された什物目録は目録の体裁を取っている。これは、記述する品目が増えたことにも拠るが、記されるべき一定の内容が固定化し、その内容は寺社の相続に際して寺物の亡失無きことが旨とされたからである。近世期の寺院における什物把握は相伝と数量管理に主眼がおかれているため、什物(例えば唐物を含む荘厳具や絵画)そのものの質的把握や鑑賞という観点からは、多くの情報を残していない。勘考も専ら什物の有無、数量に焦点が当てられているのである。

近代には、さらにこの什物が政府の宗教政策のなかで、宗教法人認定に重要な役割を果たし、課税の根拠としても用いられることになる。そのため、宗教法人は相次いで官主導による明細帳を提出することになるのである。

これら什物帳を通覧すると、中世の什宝が近世にどの程度引き継がれたのかと、懐疑的にならざるを得ない。「仏日庵公物目録」の世界は、近世には見ることができず、什物認識の変化、あるいは資料的断絶が存在するようである。

なお、別冊報告書(主要大学、研究機関、博物館等300箇所へ郵送済み)に付した本編一覧表の凡例は以下の通りである。研究成果に触れる論点も有するため掲出する。

【凡例】

一、本表に掲出の「所蔵・資料名」、「資料内容」は、『鎌倉市文化財総合目録 古文書・典籍・民俗篇』(鎌倉市教育委員会編、昭和60年3月、『総合目録』と記す)の書誌データをもとに、『鎌倉市史』(昭和31年~、『市史』と記す)編纂資料としての写真紙焼資料(『写真帳』と記す)にあたり、一部資料は実査の上、所見を記したものである。

一、『鎌倉市文化財総合目録』と『鎌倉市史』編纂資料写真との間には、資料名の齟齬、写真の有無等の異同が多くあり、現時点では資料の確認ができないものも多い。「内容」や「法量」が空欄であるのはそのことによる。

一、「内容」には資料の要点を記したが、とくに唐物に区分される法器(仏具)、荘厳具、絵画は具体的に検出し、記している。

一、「記載順」は什物帳での記載順序を大凡示したものである。資料によっては同様の事物を差す場合でも用語に差異がある(法器・法具・仏具など)。

一、一部の異体字と旧字は印刷の便宜のため現行の用字に改めた。「内容」で括弧内は原文の史料引用である。人名は大半を資料通りとした。

一、「写 巻・号」は『鎌倉市史』編纂資料写真の巻・号数である。「目録」は『鎌倉市文化財総合目録』の寺社毎の資料通番である。

一、重要資料については釈文を後掲したが、紙数の関係で限定した。後日の公刊を期す。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

論文

古川元也「日蓮聖人真蹟遺文の紙背文書」
(『日蓮聖人と法華の至宝 第二巻日蓮聖人の真蹟遺文』所収論文、pp.194 - 198、同朋舎メディアプラン、2012年12月)

古川元也「外法成就の志—上人について」
(『神奈川県立博物館研究報告』第40号、pp.29-40、2013年10月、単著)

古川元也「The Creation of Shinko-o Mandala (晨狐王曼荼羅の成立)」
(Religious Performance, City and Country in East Asia, University of Illinois, Oct, 2013、梗概集)

古川元也「ものが裏付ける鎌倉の文献史」
(『鎌倉研究の未来』第20号、pp.72-99、2014年7月)

古川元也「こもんじょを観る」
(『玻璃彩』第12号、pp.5-9、2014年12月)

社会還元

古川元也、小井川理ほか担当、特別展『世界遺産登録推進三館連携特別展 武家の古都・鎌倉』
(2012年10月6日～12月2日)

古川元也、永井晋担当、特別展『こもんじょざんまい 鎌倉ゆかりの中世文書』
(2013年10月5日～12月1日)

小井川理担当、特別展『白絵 祈りと寿ぎのかたち』
(2014年10月11日～11月16日)

学会報告

古川元也「仏日庵公物目録と記録される唐物」
(貿易陶磁研究会、2012年9月29-30日、青山学院大学)

古川元也「モノが裏付ける鎌倉の文献史」
(中世都市研究会「鎌倉研究の未来」、2013年9月7-8日、鎌倉女子大学二階堂学舎)

古川元也「晨狐王曼荼羅の成立」
(イリノイ大学・国立歴史民俗博物館国際研究集会「東アジアの仏教をめぐる交流と変容」研究集会“東アジアの宗教とパフォーマンス、都市と地域”、2013年10月9-10日、米国イリノイ大学)

古川元也「唐物研究資料としての高台について」
(神奈川県立歴史博物館調査研究報告会、

2014年3月11日)

古川元也「寺院什物帳の生成について」
(神奈川県立歴史博物館調査研究報告会、2015年3月13日)

小井川理「鎌倉彫後藤家資料に見る近代鎌倉彫の受注に関する基礎的研究」
(神奈川県立歴史博物館調査研究報告会、2015年3月13日)

書籍

古川元也、小井川理ほか『世界遺産登録推進三館連携特別展 武家の古都・鎌倉』
(pp.1-304、神奈川県立歴史博物館・神奈川県立金沢文庫・鎌倉国宝館、2012年10月、共編著)

古川元也ほか『蓮生寺 妙福寺 合寺百年記念 象鼻山御塔生福寺誌』
(2013年3月15日、監修・編著)

古川元也、永井晋『こもんじょ ざんまい 鎌倉ゆかりの中世文書』
(pp.1-224、神奈川県立歴史博物館、2013年10月、編著)

小井川理『白絵 祈りと寿ぎのかたち』
(pp.1-112、神奈川県立歴史博物館、2014年10月、編著)

古川元也、小井川理『中世鎌倉地域における寺院什物帳(文物台帳)と請来遺品(唐物)の基礎的研究』
(pp.1-270、神奈川県立歴史博物館、2015年3月、研究成果報告書、編著)

[雑誌論文](計5件)

[学会発表](計6件)

[図書](計5件)

[産業財産権]

出願状況(計 件)

該当なし

取得状況(計 件)

該当なし

[その他]

ホームページ等

<http://ch.kanagawa-museum.jp/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

古川 元也

(神奈川県立歴史博物館主任学芸員)

研究者番号：60332392

(2)研究分担者

小井川 理

(神奈川県立歴史博物館学芸員)

研究者番号：80589846

(3)連携研究者

該当なし